

問題への対処スタイルが大学生の キャリア成熟性に与える影響

浅井千秋・米山実来

Coping Style with Problems of Undergraduates and Its Influences on their Career Maturity

ASAI Chiaki and YONEYAMA Miki

Abstract

The present study examined the influences of coping style with problem on undergraduates' career maturity. A questionnaire on them was administered to 160 undergraduate students. It contained four factors of coping style with problems (i.e. flexible coping, consistent coping, resigned coping and tenacious coping) and two factors of career maturity (i.e. intrinsic motivation to vocation and effort for career achievement). The results of multiple regression analysis and correlation analysis showed that flexible coping and consistent coping were positively related to intrinsic motivation to vocation and effort for career achievement. And resigned coping was negatively related to them only on correlation analysis. However, tenacious coping found not to have any relationship with them.

問 題

1. 大学生のキャリア選択と問題への対処行動

平成の時代に長期的不況を経験した結果、多くの企業は非正規雇用を拡大し、大卒新規採用においては優秀な人材を厳選するようになった。こうした状況の中でも、就職活動に積極的な態度で取り組み、キャリア選択を成功させる学生もいる一方で、就職活動に対して消極的な態度を持ち、適切な行動がとれない学生の問題が指摘されてきた(小杉,2012)。このような学生を支援するためには、大学のキャリア教育においても、就職活動のノウハウを教えるだけでなく、より成熟したキャリア意識を形成できるようにすることが必要である(上西,2012)。

キャリア選択に対して、積極的に取り組める学生とそうでない学生には、どのような個人特性の差があるのだろうか。キャリア選択の態度や行動に影響する個人の心理的要因としては、自尊感情(Greenhaus & Simon,1976)や特性的な自己効力感(古市,2007;佐藤,2014)、進路決定や就業への自己効力感(Betz & Hackett,1981;浦上,1996a;古市,2012)、達成動機(安達,2001b)

や結果期待(Lent,Brown & Hacket,1994;安達,2001a), 情動知能(島井・大竹・宇津木,2007)やプロアクティブ・パーソナリティ(Brown,Cober,Kane,Levy & Shalhoop,2006;鶴田,2013)などが取りあげられている。

一方, キャリア選択を大学生活で経験するストレスラーとして捉え, 就職活動で生じるストレスに個人の対処行動が与える影響を検討した松田・永作・新井(2010)や, キャリア選択を大学生活で直面する問題として捉え, 問題解決スタイルがキャリア選択に与える影響を明らかにした松田・高原(2012)など, キャリア選択における課題や問題への対処行動を扱った研究も行われている。これらの研究では, 問題焦点型コーピングや合理的な問題解決スタイルが, キャリア選択行動の積極性や満足感を高めることが示されている。

また, 報酬と罰に対する接近的・回避的動機づけの生得的傾向とキャリア選択との関係を検討した Li,Guan,Wong,Zhou,Guo,Jiang & Fang(2015)や中村・川口(2015)は, 接近的動機づけを表す行動賦活系(BAS)の得点が高い者ほど, キャリア探索に積極的であることを明らかにしている。

2.問題への対処行動と適応性

キャリア選択を含めて, 大学生活における様々な課題や問題への対処行動に関する研究は多く行われており(和田,1998;中澤・榎本・中道,2007;山口・松寄・市川・長谷川,2014), 各研究によって取り上げる行動やその分類は異なっているが, 一般に対処行動は, 接近的行動と回避的行動に大別できる(Obrist,1981;尾関・渡辺・岩永,2002)。

そして, 取り組んでいる課題での目標達成やそこで生じる問題の解決に向けた計画の案出, 有効な方法の実行, 問題の肯定的解釈といった接近的な対処行動をとる者ほど, 動機づけが高くストレス反応が低いのに対して, こうした課題や問題の回避, 目標達成や問題解決のあきらめ, 問題への否定的解釈といった回避的な対処行動をとる者ほど, 動機づけが低くストレス反応が高い(中澤ら,2007;尾関・原口・津田,1991;渡辺・岩永・尾関,2002;尾関ら,2002;山口ら,2014)。

ただし, 目標達成や問題解決に対して積極的に努力することが, 必ずしも適応的な対処といえない場合もある。Averill(1973)が指摘しているように, 対処行動の有効性には, 困難な状況に対する制御可能性が関係している。個人の努力によって目標達成や問題解決が不可能な状況では, 努力を続けることがむしろ消耗感や無力感のような不適応状態を生むかもしれない。自己に関連したでき事を制御しようとする制御欲求が高いと, 困難な課題でもあきらめられず固執してしまうという(Burger,1985)。また, Burns(1980)や Hewitt & Flett(2002)は, 極端に高い基準を設けてそれを維持しようとし, 達成できなければ失敗とみなす完全主義の態度が不適応を引き起こすとしている。

上記の諸研究は, Lazarus & Folkman(1984), Compas,Forsythe,& Wagner(1988), 加藤(2001)などが主張するように, 接近的な対処行動のみを行うことが適応的とは限らず, 課題や問題の性質に対応して, 多様なレパートリーの中から適切な対処行動を選択できる柔軟性が重要であることを示唆している。Brandtstater & Renner(1990)は, 人生で直面する好ましくない状況に対して, 個人の目標や見通しなどに沿って個人の能力や資源を活用したり新たに獲得

してその状況を変えようとする同化的あるいは固執的な対処モードと、個人の選好について改訂を行い、与えられた状況を受容して適応しようとする調整的あるいは柔軟な対処モードの2つの対処モードについて論じ、同化的な対処モードには、理想の実現に努力する面と理想に固執して問題が生じる面があり、反対に調整的な対処モードには、理想の実現が脅かされたとき、新しい理想を設定できる面と、容易に理想を断念してしまう面があるといったように、どちらの対処モードも両価性を持つとしている(Brandstadter & Rothermund, 2002)。

そこで浅井・米山(2015)は、日常生活の様々な課題やそこで生じる問題に対する対処行動の傾向を問題への対処スタイルと呼び、困難な状況において、自己の計画や方法を維持しながら状況を変化させようとする能動的な対処と、状況に合わせて自己の計画や方法を変化させようとする受動的な対処の2つに分類した。さらに能動的な対処を、困難な状況において目標をあきらめずに、その達成やそこで生じる問題の解決に向けて努力を維持する一貫した対処と、目標達成や問題解決に有効でない計画や方法を修正できずに努力を続ける固執的な対処という2つに分けた。同様に受動的な対処は、困難な状況において、計画や方法の修正を適切に行いながら、目標達成や問題解決に取り組む柔軟な対処と、容易に目標をあきらめ、その達成や問題解決への努力をやめる放棄的な対処という2つに分けた。そして、これら4つの対処スタイルが独立した行動傾向であることを因子分析によって示した上で、それぞれの対処スタイルが、大学生活での全般的な動機づけに対して与える影響を検討した。その結果、柔軟な対処と一貫した対処は予想された通り適応的であり、放棄的な対処と固執的な対処は適応的とはいえないことが明らかにされた。

大学生のキャリア選択においても、適切なキャリア目標を設定し、その達成のために必要な行動を行い、その中で生じる問題を解決するなど適応的な対処を行うことが求められる(Taylor & Betz, 1983)。例えば、採用試験での失敗など困難な状況に直面しても、志望を再検討してその範囲を広げたり、次の選考に向けて必要な努力を維持するなど適応的な対処がとれる者は、キャリア選択を成功しやすいと予想される。しかし、1つの採用試験での失敗を機に就職活動をやめてしまったり、反対に、高すぎる目標を設定してこれに固執するといった不適応な対処を行う者は、キャリア選択に失敗しやすいと考えられる。先述の松田・高原(2012)や Li, et al. (2015)も示す通り、大学生が日常の課題や問題において、どのような対処行動の傾向を持っているかは、彼らのキャリア選択に関する態度や行動にも影響を与え、結果としてキャリア選択の成否を左右するだろう。そこで本研究では、大学生の4つの問題への対処スタイルが、キャリア選択に関連した彼らの態度や行動にどのような影響を与えるかを検討する。

3. キャリア意識の成熟性

それでは、キャリア選択に関連した態度や行動にはどのようなものがあるだろうか。キャリア選択の成功を促進する様々な態度や行動の要因を包括した概念として、職業成熟性 (Super & Kidds, 1979; Savickas, Silling, & Schwartz, 1984) やキャリア成熟性 (Crites, Wallbrown, & Blaha, 1985; Westbrook, Sanford, O'Neal, Horne, Fleenor, & Garren, 1985; 長岡・松井, 1999)、職業レディネス(若林・後藤・鹿内, 1983)や職業キャリア・レディネス(坂柳, 1996)などがある。ま

た、キャリア選択に対する特定の態度や行動を表す概念としては、Greenhaus(1973)のキャリア・サリエンスや古市(2007)の職業志向傾向などがある。こうした研究で取り上げられてきた様々な要因は、職業とキャリア選択に対する関心度や自律性、内発的動機の強さといった情緒的な要因と、職業生活とキャリア選択に関する情報収集、目標や計画の明確さ、その達成へ向けた努力といった認知・行動的な要因に分けられるだろう。本研究では、キャリア選択の成功を促すような個人の職業生活やキャリア選択に関する態度をキャリア成熟性と呼び、その具体的な要因を情緒的側面と認知・行動的側面に分けて検討する。

まず、職業生活とキャリア選択に対する情緒的な要因について明確にしよう。Jordaan(1963)は、職業への内発的動機がキャリア探索への積極性と関係すると主張し、Greenhaus & Simon(1976)と Greenhaus & Sklarew(1981)は、職業を重視し肯定的感情を持つ大学生が、達成感や創造性などの内発的欲求を満たす職業を理想と考え、キャリア探索に積極的に取り組み、こうした職業を選択したことへの満足も高かったことを示した。また浅井(2014)は、職業にやりがいや自己成長を求める職業への内発的動機が、自己の能力や志望の内省と理解を促すことを明らかにしている。

職業への内発的動機に関する概念としては、この他に、若林・後藤・鹿内(1985)の職務挑戦志向や安達(1998)の挑戦志向、古市(2007)の自己実現志向などがあり、これらの研究でも、職業においてやりがいや能力発揮を求め、仕事での成功や自己成長のために努力しようとするなど職業への内発的動機の高い学生が、職業生活に積極的な態度を持ち、自己の適性を理解した上でキャリア目標を明確にしておき、職業に関する情報収集や能力開発といった活動への動機づけや積極性も高いことが示されている。

そこで本研究では、職業にやりがいや能力発揮を求め、仕事における成功や自己成長のために努力するなど内発的欲求を重視しその充足を求める態度を職業への内発的動機と呼び、キャリア成熟性の情緒的要因として取り上げる。

職業に対して内発的な動機を持つことは、キャリア選択への動機づけを維持する点で重要である。しかし、キャリア選択を成功させるためには、さらにキャリア選択に関する具体的な諸活動に効果的に取り組むことが必要である。Taylor & Betz(1983)は、キャリア選択の具体的な活動として、志望する職業や職業生活に関する目標の明確化を挙げている。キャリア目標の明確化は、キャリア成熟性の認知的な要因として、Super & Kidd(1979)、坂柳(1996)、Blustein(1988)、柴田・安住(2011)など多くの研究で取り上げられている。

ただし、適切なキャリア目標を設定するには、自己の能力や欲求などの特徴を振り返り、職業についても情報を収集し理解した上で、その適合を図ることが重要となる(Super, 1957; Westbrook, *et al.*, 1985)。Stumpf, Colarelli, & Hartman(1983)は、自分自身の能力や欲求などについて内省し理解する自己探索と、職業に関する情報を収集し理解する環境探索を、キャリア決定のために必要な2つの情報収集として位置づけており、Taylor & Betz(1983)も、キャリア選択の具体的な活動として、自己の理解と職業に関する情報収集を挙げている。Westbrook, *et al.*(1985)は、これらの情報収集をキャリア発達において中心的な活動としており、自己や職業に関する情報収集は、キャリア成熟性の行動的な側面に関わる代表的

な要因である。

情報収集と同様に、キャリア選択に関する具体的な活動として挙げられるのが、将来の職業に有効となる能力向上への努力である。浦上(1996a)は、具体的な就職活動の項目として、志望する職業で役立つ免許・資格の取得を、古市(2007)は、職業志向性の項目として、職業に役立つ知識や技術の習得や資格・免許の取得への動機づけを取り上げている。浅井(2014)も、キャリア目標達成のための学習や能力向上をキャリア成熟性の項目として取り上げている。このように、志望する職業に役立つ知識や技術、資格の獲得といった能力向上への努力も、キャリア成熟性の行動的な側面を表す要因といえる。

また Taylor & Betz(1983)は、キャリア選択で必要な活動として、将来の職業で役立つ資格取得など在校中に行うべき活動の計画化を挙げ、坂柳(1996)は、職業キャリア・レディネスの項目として、キャリア目標を達成するための具体的計画の立案を取り上げている。同様に浦上(1996a)は、具体的な就職活動の項目として、職業選択に役立つ情報収集などの計画と実行を、富永(2010)や浦上(1995)は、進路決定自己効力の項目に、進路決定に役立つ勉強の計画と実行、免許・資格取得の計画をそれぞれ含めている。キャリア選択や将来の職業に役立つ活動の計画や実行も、キャリア選択を成功させるために有効な行動であり、キャリア成熟性の高さを表す特徴とみなせるだろう。

浦上(1996a)と浅井(2014)では、上述のキャリア目標の設定、職業に関する自己考察、職業に関する情報収集、その達成に役立つ能力の明確化、能力向上への動機づけ、こうした活動の計画的実行に関する項目に統計的な関連性が示されている。自己と職業についての情報収集と理解は、適切なキャリア目標の設定を促し、その達成のための計画の質を高めるという(Westbrook, *et al.*, 1985)。そして、キャリア目標が明確になることで情報収集が効率的になり(室山, 1997; Stumpf, *et al.*, 1983; 花井, 2007)、必要な能力の向上などの活動も明確になる結果、こうした活動への動機づけや計画的な努力が促される(Westbrook, *et al.*, 1985; 花井, 2007)。さらには、こうした具体的なキャリア選択の活動を通して、職業に関する自己の能力や志向についての再考と明確化も行われるようになる(浦上, 1996b)。

このように、キャリア目標の明確化、自己や職業に関する情報収集や将来のキャリアに役立つ能力の向上、こうしたキャリア選択に必要な活動への動機づけと計画的な実行はお互いに影響し合い、強い関連があるといえる。そこで本研究では、自己に適合したキャリア目標の明確化、キャリア選択に関連した情報収集や能力向上などの活動に対する動機づけ、こうした活動に関する計画的な実行を合わせてキャリア達成努力と呼び、キャリア成熟性の認知・行動的要因として取りあげる。

4. 研究の目的と仮説

以上の検討に基づいて、本研究では、柔軟な対処、一貫した対処、放棄的な対処、固執的な対処という4つの問題への対処スタイルが、職業への内発的動機とキャリア達成努力という2つのキャリア成熟性の要因に与える影響を検討する。

浅井・米山(2015)では、柔軟な対処と一貫した対処をとる者は、大学生活における全般的な

動機づけが高かった。そして浅井(2014)では、大学生活での達成経験で自己肯定感を持った者が、職業においてもやりがいや自己成長などの内発的欲求の充足を求めることが示されている。柔軟な対処や一貫した対処がとれる者は、大学生活の様々な課題での目標達成や問題解決に対して効果的に取り組むことで肯定的な成果を上げ、達成感や自己肯定感といった内発的欲求の充足を経験してきたと思われる。こうした学生は、職業生活においても内発的欲求の充足を重視し、仕事での成功や自己成長のために努力しようとするだろう。したがって、柔軟な対処や一貫した対処がとれる者ほど職業への内発的動機も高いと予想される。

また松田ら(2010)や松田・高原(2012)では、問題解決を志向する適応的な対処行動をとる者ほどキャリア選択行動が活発であることが示されており、川瀬(2015)では、大学での学業やアルバイトなどの取り組みとその成果が進路探索行動を促していた。柔軟な対処や一貫した対処がとれる者は、大学生活での様々な活動に積極的に取り組み、肯定的な成果を挙げてきたと考えられる。そしてキャリア選択においても、目標の達成やそこで生じる問題の解決に効果的な対処を行うことによって肯定的な成果を挙げようとするだろう。したがって、柔軟な対処と一貫した対処がとれる者ほど、自己に適したキャリア目標の設定と、情報収集や能力向上への計画的な努力を表すキャリア達成努力も高いと予想される。

これに対し、放棄的な対処スタイルを持つ学生は、浅井・米山(2015)において、大学生活での積極性や向上心、意欲の高さを表す全般的な動機づけが低い傾向を示していた。また中澤ら(2007)では、回避的な問題解決方略が、放棄・あきらめの高さとも、学業およびキャリア選択に対する動機づけや準備行動とも有意に関連していた。放棄的な対処を取りやすい者は、様々な課題において容易に目標をあきらめやすく、肯定的な成果も挙げられないため、達成感や自己肯定感といった内発的欲求の充足を経験できなかったと考えられる。このため彼らは、職業生活においても、内発的欲求の充足を重視して仕事での成功や自己成長のために努力しようとは考えず、また、自己に適したキャリア目標を設定して情報収集や能力向上を計画的に行うことも難しいだろう。このため、放棄的な対処をとりやすい者ほど、職業への内発的動機やキャリア達成努力も低いと予想される。

上記の3つの対処スタイルと異なり、固執的な対処は、浅井・米山(2015)において大学生活での全般的な動機づけに正負いずれの影響も示さず、固執的な対処スタイルを持つ者が必ずしも不適応な傾向を示すとはいえなかった。この結果には、固執的な対処が肯定的な成果に結びつきにくいとはいえ、目標をあきらめずに努力を維持するという能動的な特性も有していることが関係していると思われる。また固執性を特徴として含む完全主義が、適応と不適応の2つの側面を持つという指摘もあり(石田,2005)、固執的な対処が必ずしもキャリア成熟性を低めるとはいえないだろう。

以上の議論に基づいて、本研究では次の3つの仮説を立て、その妥当性を検証する。

仮説1：柔軟な対処スタイルを持つ者ほど、職業への内発的動機とキャリア達成努力が高い。

仮説2：一貫した対処スタイルを持つ者ほど、職業への内発的動機とキャリア達成努力が高い。

仮説3：放棄的な対処スタイルを持つ者ほど、職業への内発的動機とキャリア達成努力が低い。

一方、固執的な対処スタイルが職業への内発的動機やキャリア達成努力にどのような影響を

与えるのかは、探索的に調べることにする。

なお、大学生のキャリア成熟性の規定要因を検討する際には、学年の影響も考慮する必要があるだろう。大学生のキャリア成熟性における継時的変化について検討した松井(2015)は、2年次よりも3年次の方が職業キャリアの計画性が高まったことを示している。また浦上(1996b)は、短大生が就職活動を通して、自己や職業の理解や活動内容の再検討を行いながら成長していくことを示している。特に、志望する企業・団体の説明会に参加したり、面接試験を受けるなど具体的な就職活動に取り組む時期において、大学生のキャリア成熟性は大きく変化すると考えられ、4年次生のキャリア成熟性が3年次生と比較してより高くなることも予想される。したがって本研究では、キャリア成熟性に対する学年の影響を検討に加える。

方 法

1.調査対象

2015年6月と2016年6月に、T大学に所属する3年次生と4年次生に対して質問紙調査を実施した。そして、本調査で用いた質問項目への回答で欠損値のない160名を対象として分析を行った。回答者の属性は、3年次生が75名(46.9%)、4年次生が85名(53.1%)、年齢は20歳～23歳で、平均20.8歳、男性は59名(36.9%)、女性は101名(63.1%)である。就職志望者は132人(82.5%)、進学志望者は17人(10.6%)、未定などその他が11人(6.9%)である。

2.調査項目

問題への対処スタイルを測定するために、浅井・米山(2015)の因子分析において、対処スタイルの4つの因子にそれぞれ負荷量が高く、内容的に妥当と思われる項目を4項目～6項目取り上げて、各対処スタイルの質問項目とした(表1)。職業への内発的動機とキャリア達成努力については、下山(1996)、安達(1998)、坂柳(1999)、浅井(2003)、浅井(2014)を参考に、それぞれの質問項目を作成した。職業への内発的動機の質問項目は7項目で、表2に示し、キャリア達成努力の質問項目は8項目で表3に示した。すべての項目は、“全くあてはまらない(1点)”から“非常にあてはまる(5点)”までの5段階評定尺度である。

3.分析方法

問題への対処スタイルの質問項目は、浅井・米山(2015)によって因子的妥当性が確認されているため、それぞれの項目に対する回答の合計によって算出した。職業への内発的動機とキャリア達成努力については、まずそれぞれの質問項目への回答に対して主成分分析を行った。職業への内発的動機もキャリア達成努力も共に、すべての質問項目が第1主成分に対して高い負荷量を示し、一次元性が確認されたため(表2、表3)、それぞれの質問項目に対する回答の合計を、職業への内発的動機およびキャリア達成努力の得点とした。

表 1 問題への対処スタイルの項目と信頼性

1.柔軟な対処 $\alpha=.81$	
Q3-01	困難な状況に直面したときは、目的に合わせて方法や計画を変えて達成する。
Q3-03	困難な状況に直面したとき、それを解決するために役立つ情報を探す。
Q3-04	目標達成のために、いろいろな方法を見つけることができる。
Q3-19	問題に直面した時に多角的な視点から状況を見るようにしている。
Q3-21	失敗しそうな場合でも前向きな考えに転換して達成しようとする。
Q3-22	計画や状況の変化に難なく自分を合わせて方法や計画を変えて達成する。
2.一貫性した対処 $\alpha=.82$	
Q3-11	大きな困難に直面したときでも、自分の目標はあきらめずに実現する。
Q3-12	難しい課題を与えられたときでも、やり遂げるまで努力を続ける。
Q3-13	困難な状況におちいったときも、いっそうの努力をして解決することが多い。
Q3-29	簡単に満足せずに、自分の望み通りになるまで、ひたすら努力を続ける。
3.放棄的な対処 $\alpha=.66$	
Q3-08	達成が困難な状況の場合、方法を工夫するよりそのまま諦める。
Q3-09	困難な状況におちいったときは、あまり努力をしないで別の活動に変える。
Q3-24	目標が達成困難であれば、それに見切りをつけることは簡単である。
Q3-25	失敗を避けるために、目標を低く設定するようにしている。
Q3-26	挫折や失敗、自分の限界を受け入れることに何の抵抗も感じないことが多い。
4.固執的な対処 $\alpha=.76$	
Q3-14	不可能なことがわかっていても、なかなか目標や計画を変えられない。
Q3-15	今までの方法で目標達成が困難でも、方法を変えられず、うまくいかなくなる。
Q3-16	うまくいかないときでも、自分のやり方にこだわってしまう。
Q3-31	目標や方法について考えを変えられず、非常に頑固になることがある。
Q3-33	うまくいかない方法でも、変えずにやり通そうとしてしまう。
(N=160)	

そして、問題への対処スタイルとキャリア成熟性の関連性を明らかにするため、上記6つの要因間の相関係数を算出した。さらにキャリア成熟性に対する問題への対処スタイルと学年の効果を明らかにすると共に、学年による影響を除いた問題への対処スタイル独自の効果を検討するため、学年と4つの問題への対処スタイルを独立変数として、職業への内発的動機とキャリア達成努力を従属変数として重回帰分析を行った。

表 2 職業への内発的動機の主成分分析

	I
Q4-08 私にとってやりがいのある仕事をする事は、非常に重要である。	0.86
Q4-04 仕事に打ち込むことを通じて、自分を成長させていきたいと思う。	0.82
Q4-05 自分の選んだ職業を通じて、自分の能力を十分に発揮してみたい。	0.77
Q4-18 自分の仕事に誇りをもてるように頑張りたいと思う。	0.73
Q4-07 就職をしたら、働くことに生きがいを感じられる生活を送りたい。	0.71
Q4-19 自分の仕事を成功させるためなら、人一倍努力したいと思う。	0.67
Q4-06 できれば仕事はしたくない。(R)	0.47
因子寄与	3.70
(N=160)	

表3 キャリア達成努力の主成分分析

		I
Q4-25	どんな職業生活を送っていききたいのか、自分なりの目標を持っている。	0.78
Q4-26	志望する職業に就くために、具体的な計画を立てている。	0.78
Q4-03	就きたい職業に役立つ情報を、積極的に収集するようにしている。	0.76
Q4-15	自分がどのような職業に就きたいのか明確になっている。	0.75
Q4-02	将来就きたい仕事のために、努力しようと思う。	0.74
Q4-10	自分に向いている仕事かわからない。(R)	0.67
Q4-13	日常生活の中で仕事に役立つことは何でも吸収していきたい。	0.44
Q4-14	将来仕事で活用できる知識や技術を身につけたい。	0.44
	因子寄与	3.75
		(N=160)

結 果

1.問題への対処スタイルおよびキャリア成熟性の尺度信頼性

問題への対処スタイルを測る尺度の信頼性は、柔軟な対処が $\alpha=.81$ 、一貫した対処が $\alpha=.82$ 、固執的な対処が $\alpha=.76$ で、これらの尺度については比較的高い信頼性が得られた。放棄的な対処については $\alpha=.66$ とやや低いが、ある程度信頼性が得られたといえるだろう(表1)。キャリア成熟性を測る尺度の信頼性は、職業への内発的動機が $\alpha=.76$ 、キャリア達成努力が $\alpha=.83$ であり、共に高い信頼性が得られた(表2、表3)。

2.問題への対処スタイルおよびキャリア成熟性の要因間相関

問題への対処スタイルおよびキャリア成熟性の要因間の相関係数を表4に示す。柔軟な対処と一貫した対処には $r=.61(p<.01)$ と比較的高い有意な正の相関があった。これに対し放棄的な対処は、一貫した対処($r=-.42, p<.01$)と柔軟な対処($r=-.28, p<.01$)の双方に対して有意な負の相関が示された。固執的な対処は、一貫した対処や柔軟な対処だけでなく放棄的な対処とも有意な相関がなかった。職業への内発的動機とキャリア達成努力との間には、 $r=.66(p<.01)$ と強い有意な正の相関があった。

表4 問題への対処スタイル、職業への内発的動機およびキャリア達成努力の平均と相関

	平均	SD	柔軟な対処	一貫した対処	放棄的な対処	固執的な対処	職業への内発的動機
柔軟な対処	21.4	3.93					
一貫した対処	13.1	2.99	0.61 **				
放棄的な対処	14.1	3.46	-0.28 **	-0.42 **			
固執的な対処	14.9	3.77	-0.12	0.06	0.07		
職業への内発的動機	27.6	4.85	0.49 **	0.61 **	-0.32 **	0.05	
キャリア達成努力	28.1	5.88	0.49 **	0.54 **	-0.28 **	-0.03	0.66 **
							(N=160)

3.問題への対処スタイルからキャリア成熟性への影響

学年および4つの問題への対処スタイルが、キャリア成熟性の2要因に与える影響を検討し

た重回帰分析の結果を表5に示す。影響指数はすべて標準偏回帰係数である。

職業への内発的動機に対しては、一貫した対処($\beta=.45, p<.01$)と柔軟な対処($\beta=.20, p<.05$)が有意な影響を与えていた。重回帰モデル全体の決定係数は $R^2=.40$ である。

キャリア達成努力に対しては、一貫した対処($\beta=.34, p<.01$)と柔軟な対処($\beta=.25, p<.01$)、学年($\beta=.16, p<.05$)が有意な影響を与えていた。重回帰モデル全体の決定係数は $R^2=.36$ である。

表5 問題への対処スタイルから職業への内発的動機およびキャリア達成努力に対する重回帰分析

	職業への内発的動機		キャリア達成への努力	
学年	-0.01		0.16	*
柔軟な対処	0.20	*	0.25	**
一貫した対処	0.45	**	0.34	**
放棄的な対処	-0.08		-0.06	
固執的な対処	0.05		0.00	
決定係数(R^2)	0.40	**	0.36	**
			($N=160$)	

重回帰分析においては、放棄的な対処と固執的な対処から、職業への内発的動機とキャリア達成努力への有意な影響は示されなかった。ただし相関分析(表4)において、放棄的な対処と職業への内発的動機との間には $r = -.32(p<.01)$ の、キャリア達成努力との間には $r = -.28(p<.01)$ の有意な負の相関が示された。一方、固執的な対処は相関分析においても、キャリア成熟性の2要因との間に有意な相関がみられなかった。

考 察

1. 問題への対処スタイルおよびキャリア成熟性の要因間の関係

柔軟な対処と一貫した対処には比較的強い有意な正の相関があり、大学生活の様々な課題における困難な状況で、計画や方法の修正を適切に行いながら目標達成や問題解決に取り組める者は、目標をあきらめずにその達成や問題解決への努力を維持する傾向もあり、日常生活の課題や問題に対して適応的な対処ができる者だといえる。

これに対し放棄的な対処は、一貫した対処と柔軟な対処の双方に対して有意な負の相関があり、困難な状況において容易に目標をあきらめ、その達成や問題解決への取り組みをやめてしまう者は、目標達成や問題解決に向けた持続的な努力ができないだけでなく、計画や方法を修正しながら取り組む柔軟性もあまり有していないことがわかり、不適応な対処の傾向を持つ者だといえる。

一方、固執的な対処は、一貫した対処や柔軟な対処だけでなく放棄的な対処とも有意な相関がなかった。この結果は、困難な状況で有効でない計画や方法を修正できずに努力し続けてしまう者の中には、一貫した対処や柔軟な対処のような適応的な対処行動を行える者もいると同時に、効果的でない努力を続けた結果、放棄的な対処に陥ってしまう者もいることを示している。固執的な対処をとる者が適応的になるか不適応になるかは、例えば、取り組んでいる課題

における目標達成や問題解決の困難度といった状況要因や、達成不可能な目標に対する固執性の強さ、挫折経験後の意欲低下の程度、心理的な回復力の低さといった他の個人要因によっても異なってくると思われる。

また、職業への内発的動機とキャリア達成努力には強い有意な正の相関があった。職業において内発的欲求の充足を求め、仕事での成功や自己成長のために努力したいと思う大学生ほど、自己に適したキャリア目標を設定し、必要な情報収集や能力向上に対しても計画的に取り組んでいることがわかり、職業への内発的動機が、キャリアに関する自己考察やキャリア目標達成への努力を促すことを示した浅井(2014)の知見とも合致している。

2.問題への対処スタイルがキャリア成熟性に与える影響

職業への内発的動機に対しては、一貫した対処と柔軟な対処が有意な影響を与えており、仮説1および仮説2を支持する結果であった。特に一貫した対処は、職業への内発的動機を強く規定していた。浅井(2014)では、過去に達成経験を持つ大学生は自己肯定感が高く、職業に対して内発的欲求の充足を望む傾向にあった。一貫した対処や柔軟な対処を行う傾向がある者は、大学生活での様々な課題における目標達成や問題解決に効果的な方法で取り組むことで肯定的な成果を挙げ、達成感や自己肯定感のような内発的欲求の充足を経験してきたと思われる。その結果、彼らは職業においても内発的欲求の充足を望むのだといえる。

しかし、職業への内発的動機に対して学年の影響は見られなかった。本研究の対象となった大学3年次生は、企業・団体の説明会や面接試験など具体的な就職活動をまだ経験していない6月に本研究の質問紙調査への回答をしており、職業において内発的欲求を重視しその充足を求める態度は、こうした具体的な就職活動を行う以前に形成されている傾向であるといえる。

キャリア達成努力に対しても、一貫した対処と柔軟な対処が有意な影響を与えており、仮説1および仮説2を支持する結果であった。キャリア選択を成功させるためには、自己に適したキャリア目標を決め、情報収集や能力向上など必要な活動への動機づけを維持して計画的に努力することが求められるが、こうした活動は順調に進むわけではなく、困難に直面することも多い。こうした状況においても一貫した対処や柔軟な対処ができる者は、目標達成や問題解決に向けて努力を維持したり、計画や方法の修正を適切に行いながら取り組むことができる。その結果、困難の中でも挫折することなく、自らのキャリア目標達成のために必要な活動を継続できるのだと考えられる。

またキャリア達成努力には、弱いが学年の影響も見られた。キャリア目標を決定して情報収集や能力向上を行うなどキャリア選択の具体的な活動は、近年3年次生の後半から行われているため、3年次生の6月時点よりも4年次生の6月時点の方がより活発になっていたと思われる。しかしキャリア達成努力に対しては、学年の影響よりも、一貫した対処や柔軟な対処など適応的な対処を行う傾向の影響がより強く、目標達成や問題解決における対処行動のスタイルという個人の心理的特性が、キャリア選択に対する積極的な行動傾向の形成により重要であるといえる。

一貫した対処と柔軟な対処は、一般に適応的と考えられる対処行動の特徴を持ち、これらの

対処行動をとりやすい者ほど、職業への内発的動機やキャリア達成努力のようなキャリア成熟性が高いという結果は、問題解決を志向する適応的な対処とキャリア選択行動の活発さとの関連を示した松田ら(2010)や松田・高原(2012)の知見とも合致する。

一方、放棄的な対処は重回帰分析において、職業への内発的動機とキャリア達成努力に対する有意な影響を示していなかった。これは、回避的な対処がキャリア選択行動に有意な影響を与えていなかった松田ら(2010)や松田・高原(2012)の結果とも類似している。ただし相関分析では、職業への内発的動機やキャリア達成努力との間に弱いながらも有意な負の関係が示されており、放棄的な対処をとりやすい者ほど、職業において内発的欲求を重視し、仕事での成功や自己成長のために努力しようとする傾向や、自己に適したキャリア目標を設定し、その達成に向けて計画的に努力する傾向も低いことが見てとれる。このように仮説3を支持する結果は、相関分析のみでしか示されなかった。

放棄的な対処とキャリア成熟性との相関が比較的弱かった理由として、例えば、これまでの大学生活で放棄的な対処をとっていた学生の中にも、キャリア選択のような人生において重要な課題に直面して真剣に取り組むようになり、キャリア成熟性を高めていく者がいるなどの可能性が考えられるだろう。また重回帰分析で、放棄的な対処がキャリア成熟性に有意な影響を示さなかった統計的な原因として、放棄的な対処が一貫した対処とある程度強い負の相関があるため、他の独立変数の影響を除いた効果を算出する重回帰分析では、キャリア成熟性により強い影響を持つ一貫した対処からのみ、キャリア成熟性の2要因に有意な影響が表れたことが挙げられる。

固執的な対処スタイルは、重回帰分析と相関分析の両方で、職業への内発的動機とキャリア達成努力に対する有意な関連を示さなかった。この結果から、固執的な対処行動をとる学生の中には、職業に対して内発的動機を持たず、キャリア目標の設定やその達成に必要な活動を行うことができない者がいる一方で、職業に対して内発的動機を持ち、自己に適したキャリア目標を設定して、その達成のために計画的に努力する者もある程度存在するといえる。固執的な対処は、不可能な目標や効果のない方法にこだわる不適応な面と、困難の中でも努力を維持する適応的な面という両価性(Brandstadter & Rothermund, 2002)を持っているため、この対処スタイルがキャリア成熟性に与える影響については、さらなる検討が必要である。

3. 本研究の意義と課題

本研究は、大学3年次生と4年次生を対象として、柔軟な対処、一貫した対処、放棄的な対処、固執的な対処という4つの問題への対処スタイルが、職業への内発的動機とキャリア達成努力というキャリア成熟性を表す2つの要因に与える影響を検討した。

重回帰分析と相関分析を通して、適応的な対処スタイルである柔軟な対処と一貫した対処は、仮説通り、職業への内発的動機とキャリア達成努力の両要因に対して有意な正の影響を与えていた。また、不適応な対処スタイルと考えられた放棄的な対処は、相関分析のみであったが、職業への内発的動機とキャリア達成努力の両要因に対して有意な負の関係が示された。これらの結果は、大学生が日常生活で取り組む目標達成や問題解決への対処行動の傾向が、彼らのキ

キャリア選択に関する態度や行動の成熟性にも影響を与えることを明らかにしたといえる。

こうした知見から、大学生のキャリア支援においては、就職活動で想定される様々な問題に対する適切な対処方法を教え、実行できるように支援するといったアプローチが有効であると思われる。

ただし固執的な対処についてはキャリア成熟性への影響が見られず、固執的な対処行動のスタイルを持ちながらも適応的に行動できる者と不適応な行動をとる者との違いはなぜ生じるのかについて明らかにできなかった。また所属する大学や専攻分野によって、志望する職業分野や具体的な就職活動の内容も異なると考えられるため(浦上,1996a)、こうした要因の影響を考慮した研究も今後必要となるだろう。

引用文献

- 安達智子 (1998) 大学生の就業動機測定を試み 実験社会心理学研究,38(2),172-182.
- 安達智子 (2001a) 大学生の進路発達過程－社会・認知的進路理論からの検討－ 教育心理学研究,49,326-336.
- 安達智子 (2001b) 就業動機尺度の概念的妥当性－動機、自己効力感との関連について－ 実験社会心理学研究,41(1),45-51.
- 浅井千秋 (2003) 多次元企業魅力尺度 『組織の診断と活性化のための基盤尺度の研究開発－HRM チェックリストの開発と利用・活用－』 日本労働研究機構調査研究報告書,161,318-346.
- 浅井千秋 (2014) 達成経験と社会的サポートがキャリア成熟性に与える影響 東海大学教育研究所紀要,22,31-43.
- 浅井千秋・米山実来 (2015) 問題への対処スタイルが大学生の学生生活における動機づけに与える影響 東海大学文学部紀要,104,45-55.
- Averill,J.R. (1973) Personal control of aversive stimulation and its relationship to stress. *Psychological Bulletin*,80,286-303.
- Betz,N.E., & Hackett,G. (1981) The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*,28,399-410.
- Blustein,D.L. (1988) The relationship between motivational processes and career exploration. *Journal of Vocational Behavior*,32,345-357.
- Brandstadter,J., & Renner,G. (1990) Tenacious goal pursuit and flexible goal adjustment:Explication and age-related analysis of assimilative and accommodative strategies of coping. *Psychology and Aging*,5(1),58-67.
- Brandstadter,J., & Rothermund,K. (2002) The life-course dynamics of goal pursuit and goal adjustment:A two-process framework. *Developmental Review*,22,117-150.
- Brown,D.J.,Cober,R.T.,Kane,K.,Levy,P.E.,& Shalhoop,J. (2006) Proactive personality and the successful job search: A field investigation with college graduates. *Journal of*

- Applied Psychology*,91(3),717-726.
- Burger,A.T. (1985) Desire for control and achievement-related behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*,48,1520-1533.
- Burns,D.D. (1980) The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*,11,34-52.
- Compass,B.E.,Forsythe,C.J., & Wagner,B.M. (1988) Consistency and variability in causal attributions and coping with stress. *Cognitive Therapy and Research*,12,305-320.
- Crites,J.O.,Wallbrown,F.H.,& Blaha,J. (1985) The career maturity inventory:Myths and realities - A rejoinder to Westbrook,Cutts,Madison,and Arica (1980). *Journal of Vocational Behavior*,26,221-238.
- Greenhaus,J.H. (1973) Factorial investigation of career salience. *Journal of Vocational Behavior*,3,95-98.
- Greenhaus,J.H., & Simon,W.F. (1976) Self-esteem,career salience,and choice of ideal occupation. *Journal of Vocational Behavior*,8,51-58.
- Greenhaus,J.H., & Sklarew,N.D. (1981) Some sources and consequences of career expectation. *Journal of Vocational Behavior*,18,1-12.
- 花井洋子 (2007) キャリア自己効力感のモデル化—大学生を対象として— 関西大学大学院人間科学,67,73-87.
- Hewitt,P.L., & Flett,G.L. (2002) Perfectionism and stress processes in psychopathology. In Flett,G.L., & Hewitt,P.L.(Eds.),*Perfectionism:Theory,research,and treatment*. Washington DC:American Psychological Association.
- 古市裕一 (2007) 青年の職業志向傾向と就業動機および自己効力感 岡山大学教育学部研究集録,136,145-151.
- 古市裕一 (2012) 青年の職業忌避的傾向と自己効力感および就業不安 岡山大学大学院教育学研究科研究集録,151,43-50.
- 石田裕昭 (2005) 大学生の完全主義傾向と課題解決方略の非効率性：なぜ彼らの努力は報われないのか 社会心理学研究,20(3),208-215.
- Jordaan,J.P. (1963) Expolatory behavior: The formation of self and occupational concepts. In Super,D.E., Statisherkesky,R.,Mattin,N.,& Jordaan,J.P. (Eds.) *Career Development:Self-concept theory*. New York:College Entrance Examination Boad. PP.42-78.
- 川瀬隆千 (2015) 宮崎公立大学学生の進路選択自己効力の要因としての遂行体験 宮崎公立大学人文学部紀要,23(1),1-12.
- 加藤司 (2001) コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係 心理学研究,72(1),57-63.
- 小杉礼子 (2012) 大卒就職の変化と未就職卒業者支援『学卒未就職者に対する支援の課題』日本労働政策研究・研修機構労働政策研究報告書,141,75-102.
- Lazarus,R.S., & Folkman,S. (1984) *Stress,Appraisal,and Coping*. New York:Springer.
- Lent,R.W.,Brown,S.D.,& Hacket,G. (1994) Toward a unifying social cognitive theory of

- career and academic interest, choice, and performance [Monograph]. *Journal of Vocational Behavior*, 45, 79-122.
- Li, Y., Guan, Y., Wong, F., Zhou, X., Guo, K., Jiang, P., & Fang, Z. (2015) Big-five personality and BIS/BAS traits as predictors of career exploration: The mediation role of career adaptability. *Journal of Vocational Behavior*, 89, 39-45.
- 松田侑子・永作稔・新井邦二郎 (2010) 大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響－コーピングに着目して－ 心理学研究, 80, 512-519.
- 松田侑子・高原未央 (2012) 大学生における就業動機, 問題解決スタイル, キャリア探索の関連 東海学院大学紀要, 6, 299-304.
- 松井賢二 (2015) 大学生のキャリア成熟に関する縦断的研究(Ⅱ) 新潟大学教育学部研究紀要, 人文・社会科学編, 7(2), 239-246.
- 室山晴美 (1997) 自己の職業興味の理解と進路に対する準備度が職業情報の検索に及ぼす効果 進路指導研究, 18(1), 17-26.
- 中村紘子・川口潤 (2015) 就業動機に BIS/BAS およびレジリエンスが与える影響－工学系大学生および社会人による検討－ 人間環境学研究, 13(1), 87-94.
- 中澤潤・榎本敦子・中道主人 (2007) 社会的問題解決が大学生の適応に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 61-69.
- 長岡大・松井賢二 (1999) 大学生における進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連 進路指導研究, 19(1), 10-17.
- Obrist, P.A. (1981) *Cardiovascular Psychophysiology*. New York: Plenum Press.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田彰 (1991) 大学生の生活ストレス－, コーピング, パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究, 4(2), 1-9.
- 尾関友佳子・渡辺諭史・岩永誠 (2002) 制御欲求と完全主義がストレス対処過程に及ぼす影響 健康心理学, 15(1), 21-31.
- 坂柳恒夫 (1996) 大学生のキャリア成熟に関する研究－キャリア・レディネス尺度(CRS)の信頼性と妥当性の検討－ 愛知教育大学教科教育研究報告, 20, 9-18.
- 坂柳恒夫 (1999) 成人キャリア成熟尺度(ACMS)の信頼性と妥当性の検討 愛知教育大学研究報告, 教育科学, 48, 115-122.
- 佐藤舞 (2014) 大学生の就職活動と特性的自己効力の関連 キャリア教育研究, 32, 39-48.
- Savickas, M.L., Silling, S.M., & Schwartz, S. (1984) Time perspective in vocational maturity and career decision making. *Journal of Vocational Behavior*, 25, 258-269.
- 柴田由己・安住伸子 (2011) 女子大学生の進路選択に対する自己効力と進路探索行動－進路選択過程としての就職活動に着目して－ キャリア教育研究, 29, 71-80.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介 (2007) 女子大学生の就職活動における情動知能の役割 経営行動科学, 20(3), 317-324.
- 下山晴彦 (1996) スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350-363.
- Stumpf, S.A., Colarelli, S.M., & Hartman, K. (1983) Development of the career exploration

- survey. *Journal of Vocational Behavior*,22,191-226.
- Super,D.E. (1957) *The Psychology of Careers:An Introduction to Vocational Development.*, New York:Harper & Brothers. 日本職業指導会(訳) 1960 職業生活の心理学 誠信書房
- Super,D.E., & Kidd,J.M. (1979) Vocational maturity in adulthood:Toward turning a model into a measure. *Journal of Vocational Behavior*,14,255-270.
- Taylor,K.M., & Betz,N.E. (1983) Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*,22,63-81.
- 富永美佐子 (2010) 高校生の進路選択の構造－進路選択能力, 進路選択自己効力, 進路選択行動の関連－ キャリア教育研究,28(2),35-45.
- 鶴田美保子 (2013) 女子大学生の就職活動におけるプロアクティブパーソナリティの役割 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集,13,15-27.
- 上西充子 (2012) 大学におけるキャリア支援：その動向 上西充子(編)『大学のキャリア支援－実践事例と省察－』 経営書院,24-76.
- 浦上昌則 (1995) 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科),42,115-126.
- 浦上昌則 (1996a) 女子短大生の職業選択過程についての研究－進路選択に対する自己効力感, 就職活動, 自己概念の関連から－ 教育心理学研究,44,195-203.
- 浦上昌則 (1996b) 就職活動を通しての自己成長－女子短大生の場合－ 教育心理学研究,44,400-409.
- 和田実 (1998) 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康の関係－性差の検討－ 実験社会心理学研究,38(2),193-201.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 (1983) 職業レディネスと職業選択の構造－保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連－ 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科),30,63-98.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 (1985) 女子大生における職業選択過程の予測的研究(Ⅱ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科),32,287-310.
- 渡辺諭史・岩永誠・尾関友佳子 (2002) 制御可能性と制御欲求が対処方略採用とストレス反応に及ぼす影響 健康心理学,15(1),32-40.
- Westbrook,B.W.,Sanford,E.E.,O'Neal,P.,Horne,D.F.,Fleenor,J., & Garren,R. (1985) Predictive and construct validity of six experimental measures of career maturity. *Journal of Vocational Behavior*,27,338-355.
- 山口豊一・松寄くみ子・市川麗・長谷川恵 (2014) 大学生の学校不適応に関する研究：大学生版 QOL 尺度の作成を中心として 跡見学園女子大学文学部紀要,49,137-147.